

## マレー半島の動物 (I)

(昭和十年三月四日受領)

宮島幹之助氏紹介

大内恒<sup>1)</sup>

東洋部、インド、マレー區 [北はタナスセリム州タヴオイ地方(北緯14度)の邊より全マレー半島及びその附屬島、スマトラ、ボルネオ、ジャヴァの3大島を包含する地域] に於ける動物の分布は、ジャヴァを除きては大同小異である。特に平野動物の分布に於てさうであつて、地質學上此大區域が元連続せる1大陸であつたといふ推測を裏書きして居る。然るにこれを各地方山間に於ける動物分布に就て見ると、相互間に於ては大同小異であるが、山間と平野のとを比較すると同一地方でありながら著明なる特異點を有してゐる。山地の動物界は寧ろヒマラヤ山脈系の高山動物分布相に酷似し、元より熱帶のことで山間高所と雖も氣温その他の條件は四時雪を頂く北印度の高山地帯とは較ぶべくもないに拘らず、その固有動物の種屬、外觀まで或る程度に近似して居ることは特記すべき點である。

インド、マレー區域の動物界は世界中最も饒富密生して居る林相を示すその地方植物界の盛觀と相俟ちて、恐らくは地球上最も繁榮を示し、南アメリカの赤道地方に於ける動物界を凌ぎ、その個體數及び種屬數とも世界一饒多と稱して宜しからうと思ふ。

又、マレー地方及び西アフリカ地方に於ける動物、殊に、鳥類及び昆蟲類の不可思議なる相似は、動物分布學上未だ充分に説明ができない。人類發祥の地點も恐らくマレー地方であるかもしれない。ジャヴァからでた *Pithecanthropus erectus* と、現今の類人猿との比較研究など興味ある研究であらう。

## 1. 哺乳類

此地方には類人猿が3種類ある。その最も大且つ稀なる者は大手長猿 *Siamang* (*Symphalangus syndactylus continentis*) で、主としてスマトラ島に産し、體軀はこの地方の他の類人猿よりも遙かに大であり、その名稱から推して誤つて手が著るしく大であるかに思ふ人もあるが、實は手は割合に短く、大なる喉頭囊を有するものである。半島に於てもペラ州の北部か

1) 大内醫學博士は國際聯盟保健部東局次長でシンガポールに在住せらる。本篇は同市博物學會にての英語講演の取邦を訂正されたものである。(編輯委員註)

2) マレー語は皆イタリック。

ラセランゴル州、ネグリミラン州に亘つて生棲して居り、海峽殖民地及びジャホール州にはこれを見ないのである。

手は割合に短くとは體軀に比較したからで、實際は、その名の如く充分巨大であり、従つて力強く、長大なるものにあつては兩指端間が5尺以上ある者が稀で無い。體毛は通例黒色、時に、口鼻部が白色であり、又、下顎部に無毛部がある。これを生擒して馴らすことが出来るが手長の牡であると相當危険であり、人を襲ふて咬傷を與へた實例もある。

次のは稍小型で2,3種 (*Hyllobates* spp.) がマレー地方に生棲して居る。*Uwa-uwa*, *Unka* は鳴聲から出た名である。その1種は森林地帯に於ては早朝、帛を裂くが如き悲哀の調を帯びた鋭い鳴聲を立てて呼號して居る。毛は眞黒乃至褐黒色、顔の周圍部に白毛を生じ、面を被つた如くなるものが多く、又1種のもは全黒のものもあり、更に全白、黄白色、灰色のものも居るし、手足は多く白色であるが、多くは黒褐色の體毛と、顔面周圍並びに手足の毛が白色である様に思はれる。一般に此猿は馴れ易く、又甚だ清潔であり、愛嬌に富み、愛玩用に適するもので、余も亦嘗て其の2,3頭を愛育した事があるが殊に清潔好きであり、例へば排便の如きも1本の本を横さまに装置しておくに必ず其の先端まで傳り行き身をかぶめて排便し、他猿の如く隨處隨時に排便するが如き失態なく、又、溫浴を好み、毎日これを抱きて石鹼水を以て拂拭するに如何にも我が意を得たりと云はぬばかりの様子を見せる。即ち最も溫良なる好愛育動物であるが惜しいことには他の猿に比して怯弱で、日本歐州等の遠距離に輸送すると長く生育せずして斃れるのが常である。死因は多くは肺炎である。之は半島一汎に廣く常棲し、海岸地方又は高山地方を除く外、多少の森林さへあれば到る處これが生棲を見るが、シンガポール島、ペナン島にこれを見ないことは、大手長猿と同様である。

次に尾長猿 *Langur* と云ふのは、所謂印度の神話に出て來る *Hanuman* と稱する神猿の本體たる猿の1種であるが、これは動物分布上の東洋部一般に廣く生棲して居て、殊にボルネオ島に多く、その4種ほどがマレー半島にも生棲して居る。尾は甚だ長く、體毛は眞黒色、灰白色、又は銀白色で、所謂ハヌウマン猿は美しき銀色のものを指し、その鼻は天狗の面の如く反りかへつて突起して居るが、多くは幼時は體毛白色で、年長となるに及び橙黄色となる。その1種 *Presbytes cristanus* はマングローブ沼澤地帯に好んで生棲し、又 *Presbytes obscurus* は海岸に近くカスアリナ樹(木麻黄科)の繁茂せる邊に棲息して居る。然しこの種の猿の最も多く棲息して居るのは矢張り高山の森林であつて、特に萬古未だ斧を入れぬ處女林には群を成して生活し、又、かなりの高山、たとへば2000mに達する山間などにも生棲し、1群40乃至50頭位も共同で集團生活を営み、又時にその群のまゝ平地に下り來つて村落を荒すこともある。一般に *Lotong* と稱するのは、強ひて和名を附ければ「木の葉猿」で、好んで木の嫩芽、幼葉等を食するものであるが、捕獲すること難く、その飼養されるもの甚だ稀である。

Macaques 族の中には褐色の「椰子猿」(*Macaca nemestrina*)と「蟹喰猿」即ち *Kula* (*Macaca cynomolgus* 及び *fascicularis*)がある。前者は平地の小森林中至る處に棲息し、稀に野生兇暴なるものもあるが、多くは人に馴れ易く、土人はこれを馴育して椰子樹に攀登せしめ數10mの梢より命のままに椰子實を採取せしめる。而も、主人が下より聲をかくれば、少くも左、右、少し上、その下、その邊のもの總て、等の10數種の號令はよくこれを明解し、意のままに好むものを選定してこれを採らしめるが、彼は兩手を以て椰子實を回轉し、これを捻ぢ切り適當の方向を見て投げ落すのが例である。飼育せる椰子猿は多くは小型であつて野生のもの程立派でないが、其の牡は時に普通に發育し終つたスパニエル犬位の大いさになるものも居るし、中には仲々性質の兇暴なものも居る。森林中でこの種の猿に襲はれ咬傷を被つた例もよく聞くことである。

この種の猿は尾は短く、所謂「狒々」に類し、後肢は前肢よりも遙かに短く、大なる臀胛胛を露出し、季節に依り燃えるが如き眞紅色を呈して居るし、又年長の者は頸部に長き毛を密生して居るものであるが、「蟹喰猿」即ち *Kula* は椰子猿よりは少々小型であるが一見よく似て居て、精檢すれば、その前後肢は略同長であること、尾は稍長くして體長と大差なく、又その體毛も灰白色調を帯びて居るし、時には綠色調でもあり、頭部は往々黄金褐色を呈して居て、マングローブの繁茂せる沼澤地方に多産しその泥中より蟹、小魚、貝等を干潮に際して捕食して居るのを見る事稀で無く、水泳も巧みであり、長時間水中を跋涉する事も平氣で廣き沼澤など渉るに水量多き時は半ば游泳し、又水底を潜行することもある。之は水表に於ては、游泳中鱒などに襲はるゝを知つて寧ろ水底の安全なる邊を呼吸を殺して歩行するものと信ぜられて居る。この習性は熱帯産猿のみに特有のことと思はれる。

マレー地方に生棲する擬猿類で一見ナマケモノに似てゐる猫猿 (*Nycticebus tardigradus*) *Kongkong*, *Kera duku*, *Nilong* は不活發な動物である。その大きさは小型の猫に比すべく、毛色の錆褐色より銀灰色迄の種々なる不快色で、多くは鼻端から殿部にかけて濃色の線條を有して居るが、殊に著しく目立つのは其の巨大なる眼であつて如何にも彼が夜間獸であることを裏書きして居る。土人の間では往々この動物をフクロフネコと云ふ意味の名で呼んで居り、又マレーの船乗り仲間では、丁度日本で牡の三毛猫が珍重されると同様に、1種のマスコットとして船中に愛育する風習もある。

マレー半島に生棲する肉食獸は、周知の如く第一に虎であつて、往々不注意なる出鱈目冒險文學作家が、無責任に書いたものにある如く獅子などは當地方には居らぬのである。同様に、やはり無責任なる熱帯冒險談や映畫などに出て來るアフリカ蕃地に於ける虎狩りや、ボルネオ奥地に於ける猛虎との大格闘談など、何れも全然嘘偽で、虎はインドから東、ビルマ、マレー地方、印度支那、支那、滿洲、朝鮮、それから寧ろシベリア方面には生棲する

が、アフリカは元より、ボルネオ島にもこれを見ぬものである。

マレー地方に生棲する虎は、その名が世界的に大なるにも拘らず、その體軀の大きさは、實は印度産の大型の虎にさへ劣る位に小型のもので、勿論、滿洲産の巨大なるものには比すべくもないが、其の猛性は恐らく世界無比で、立派な論據の上から、象を除く他の如何なる陸棲動物も虎には敵し難く、獅子の生棲に好適なるマレー地方に1頭の獅子も生棲せぬのは、虎の爲に漸次獅子が驅逐壓迫せられて絶滅したのでであると云ふ推測を爲すことさへ出来るし又アフリカ州に獅子が覇を稱へて居るのは畢竟其の地方に虎が生棲して居ない爲であると結論して居る人さへある位である。然し、マレー地方にも最近まで獅子が居つて、此處數百年間に虎の爲に驅逐し去られたのだと極論する人もあるが、これはシンガポールの地名が、土語の *Singa pura* 即ち獅子の町、又は *Singa pulau* 即ち獅子の島、と云ふ呼び方から來て居ると云ふ事に牽強附會した迷論で、シンガポールは實は外海から見える形で、獅子島、又は「島で造つた獅子」と云ふ意味に土人船乗りから呼ばれて居るに過ぎぬのである。何れにしても、今では獅子は勿論、虎も本島には居らぬ。但し、對岸のヂョホール州には何程でも居るから、恐らくは100年以前には本島にも虎が居たことと察せられ、又、今でも島内の深林には或は居るかも知れぬ。否、居たと云ふことさへ聞くのである。

トラ (*Riman*) は當地産のものは平均其の牡で8尺3-4寸位、即ち鼻端から尾端迄2m半以上であるが、牝は約1尺位小さいのを例とする。私が1931年10月に、ヂョホール州ランサ村で生擒した牡虎は身長8尺8寸に餘つたもので、相當のものであつた。

虎は隨分高山數千尺の處にも生棲し、又海岸の平地、沼澤地帯などにさへ居るが、畢竟常に鹿及び野猪の多産するところに虎も亦多棲し、これ等の餌獸の居らぬ地帯には虎も亦居らぬことと考へて間違ひは無いのである。但し、數年前半島のコーランボ市郊外で射殺した1頭の大牡虎を解剖した時に其の胃の中には普通に民家附近で捕獲した虎に見るが如き野猪、家豚、犬、猫、等の餌獸を見ずして、實に、胃を充滿せる無数の蛙を發見した事實がある。又所謂「人喰虎」と云ふのも稀ではないが、印度産の虎の如くには人を襲はぬと思はれて居る。蓋しマレー虎は其の動作が印度虎と較べて餘り敏捷でないので、寧ろ容易に捕食出来る小獸を狙ふのであるまいかと思はれる。

マレー地方ではヘウ (*Felis pardus*), *Riman kumbang* (意譯すれば「彩虎」とでも云ふか、*Kumbang* は元來甲蟲のことであるが、マレー人は少し小さな美しいものを一般に左様に稱するので、こゝでは必ずしも甲蟲と云ふのでなく、先づ *dainty* と云ふ位の意味と考へてよいと思ふのである) に2型がある。その兩型のものは學者に依りては全く別種とも論じて居る様であり、兎に角マレー地方には甚だ多く生棲して居て、シンガポールの島内にさへ人家より程遠からぬ邊にも出沒するのである。その最も普通なのは所謂「黒豹」で、よく見ると

矢張り固有の斑紋を有して居るが、インドの黒豹に見るが如き眞黒のものは稀である。黒豹よりも一層稀なるは淡色豹 (*Felis nebulosa*) 即ち *Riman dahan* である。*Dahan* とは樹枝の意であるがこゝでは線紋とでも云ふべく、その毛色があたかも線紋の如く輝き、小型の虎の如くにも見ゆる位である。即ち豹に固有の斑紋が比較的大であつて互に相集つて幾分か線紋の如くに見ゆるが、體毛は淡き鼠色がよつた色彩で、多くは全然樹上にのみ生棲して居ると云はれるが、ネグリスマラン州には最も多産し、又ネパール高原スマトラ、ボルネオにも多く居ると知られて居る。

豹の外、體長鼻端より尾端まで5尺位迄の山猫、又は野猫が、5種類位マレーに生棲して居り、何れも處女林中に發見されるが、その最も普通なのは *Felis temmincki* 即ち *Riman anjing*、「犬虎」又は「犬猫」とでも云ふ名であるが、大きさは充分に發育した大犬位、體の上表は美しい黄金色、下表は淡黄で、不規則な斑點があるところは豹に似て居る。又1種のものは *Felis marmorata* と稱し、歐洲、殊に其南部に居る山猫の如くにして、一層大なるものは其の尾が充分長い獸である。更に第3のものは *Felis planiceps* で、これは名の如く頭部が扁平、その尾は短斷して居て、これが所謂シヤム猫として知らるゝ愛育猫の祖先だと思はれて居るのである。第4のものは *Felis bengalensis* で、これこそ俗に日本で繪に畫いた豹であるが、體軀は大ならず、尾も亦割合に短い美しい色を呈して居るので、屢これが飼育を試みた人があるが、その生後數日の幼稚獸でさへ仲々人間の手に負へず、性質兇暴で到底飼育出来ぬのみならず、檻中に養へば長く生きぬ様である。

麝香猫 (*Paradoxurus hermaphroditus*) 即ち *Civet*, *Musang* 又は *Monsang* と稱するものは多く居る。その最も普通のもは「椰子猫」とでも名づけやうか、郊外のみならず市内にも往々人家の屋根などに棲んで、雉や野鼠などを食して居る。

麝香猫は普通の家猫と異りて、其の頭部は細長で鬣を有し、又其の體臭が強く、麝香鹿を思はしめる惡臭があるが、その最も著明なるものは *Biatulong* 「熊貓」 (*Arctictus biatulong*) で體長約4尺位、長き輝やける黒色の體毛を有し、時にその毛端が白色を帯びて居て、自然體色が稍鼠色に見えるが、耳は *Lynx* の如くに立つてゐるし、尾は所謂捕捉性を有し樹枝等に巻きつき得らるゝのである。これは馴致して家畜の如く飼養が出来る。

*Herpestes* に屬するもの、眞の鼬、貂等も3,4種生棲して居る。

野犬又は狼とも稱すべきもの、マレー *Anjing utang* 即ち森の犬と稱するものは *Cyon rutilans* で、俗に *Srigala* と稱す。これはインドの狼、又はドイツで云ふ「シェプハーデ」、英人の所謂「アルセーシャン」などと云ふものと同一系のもので、特にインドの *Dhole* 狼、及び赤毛の獵用犬に近似して居るが、半島の北部、ペラ州、パハン州等ではさまで稀でない。但し都市に近きところには居らぬものである。その體毛は狐色の赤色調で、尾は多毛で

大であり、その尖端が往々黒色で立派な犬であるが、殊に赤色の體で尾が金黒のものは實に立派である。多くは5,6頭乃至數10頭の群を成して横行し、羊、山羊、家畜などの外、時には大なる水牛などさへ襲ふ位で、土人はこの野犬群に際會し又は遠方からでも其の群を認むると非常に恐れ、且つ不吉と考へ、萬一不幸にも此犬を見たる時は、唯速かに口を開きて舌を露出しつゝ逃げ去るべく、若し此方より舌を出さざる前に犬が舌を顯はすが如きことあらば、1年以内に必ず1大不幸に逢ふものと信じて居るので、この種の犬に對するかゝる迷信はマレー人間のみならずインド人に於てもそのインド狼に對して同様の迷信を有し、或は右野犬の排尿するところを目撃すれば將來必ず失明すべしとか、又かゝる魔法を有する犬なるが故に、樹木の幹或は草原の繁み等に故意に排尿しおきて、人又は其の餌食となるべき動物の來りてこれに觸れて視力を損ふ様にする惡癖ありなどと云ふて居り、マレー人は元來如何なる犬をも略同様の考へを以て憎惡し、これに反して山羊は支那人同様に吉獸なりとするのであるから、豚を食せぬ回教徒も山羊肉は好みてこれを食し、従つて「羊頭を掲げて狗肉を賣る」と云ふ様な言葉が出来て居るので、これは支那本部に於ける言葉と爲すよりは寧ろ在南の支那人の言ひ初めし警句と見るのが正當であり。又、實際シンガポール市内など、至る處に文字通りに羊頭を掲げて衆客に示して居る羊肉商が居る次第である。

カハフソ *Berang-berang* (「遅い者」の義) も亦、マレー地方の殊に沼澤地帯に多く産す。これは歐洲産のものと大差が無い。

マレー熊 (*Helarctos malayanus*) *Breuang* は頗る小獸で1貫500匁のものは稀であるが、その最も小さなものでも人を咬み相當の負傷を與へる位兇暴である。

有蹄類にはマレー産諸動物中最大なるものがありその種類及び數も甚だ多い。象は *Gajak* で、極めて近年迄は半島到る處に生棲して居たものと思はれ、現にシンガポールでさへ野生の象を見たのはさまで昔の事ではなく、對岸のヂョホール州には今でも時々早朝など市中にさへ出て來るのである。但し今ではシンガポール、ペナン兩島には絶えて其の姿を見ぬ様になつて居る。

アジア産の象は近年數種の地方種に分けられたが、マレー象は *Elephas maximus hirsutus* と名づけられる。これはネグリスミラン州産の象の仔を曾て英國に送つたことがあつてその動物の病理解剖記録があり、病名は今記憶せぬが、その病理解剖後かゝる命名があつたとの記載があるが、何れにもせよ近年の命名である。マレー象はインド象の大なるに及ばぬが、スマトラ象、セイロン象よりは大型で、その象牙の重量も亦、1對90英斤に及ぶものもある。但しインド象に於ては人の知る如く象牙1本が80英斤、1對で160英斤に上る巨大なものさへある。マラッカ舊市、上部ペラ州に於ては象を家畜として飼養し種々なる勞役に服せしめるが、其他の地方では餘り象を使役して居ない。これは多分シャム人から教へられた事

らしく、先づ車を輓くことや木材の運搬などに用ひて居るのが例である。

犀 *Badak* の 1 種なる「アアジ双角犀」の學名は *Rhinoceros sumatrensis* であるが、沼澤地帯より高所は山間に至る迄廣く生棲し、可なりの峻しき山頂迄攀登する。犀は世界各地の動物園其他で要求が多く、曾て半島のチンチン州邊では犀を飼育して輸出する定業者さへあつた位である。又生きたもののみならず、その角は所謂「犀角」として漢藥に珍重せられ、その皮革は工業用に高價であるので現今の如く野獸保護法の制定なかりし以前には随分濫獲せられたことであつた。更に動物分布學上、インド、アッサム州、ビルマ、シヤム、スマトラ、ジャヴァの各地に廣く生棲し居た筈の「單角犀」 *Rhinoceros sondaicu* の如きは現今に於ては双角犀よりも一層稀となり、又地方に依りては既に絶滅の形にて、百方これを保護し居ると雖も最早其の存續は困難とさへ考へられて居るが、體軀大に、重厚なる皮膚、頸部、肩部、股部の大皺襞に依りて他種と一見して區別せられ、又單角であることは其の名の示す如くである。

バクは全身半白の不可思議なる外觀を有する第 3 紀中新世 (miocene) の遺物であるが、而も割合に稀有ならず、唯甚だ憶病で逃竄し居る爲め捕へにくい、濕地、河床、沼澤の邊に於て屢々散見する事があるのみならず、時にはゴム園内を荒し、又人家の近くに現はるゝことさへある。これを捕へて飼育するに、よく人に馴るゝも餌食に相當の注意を拂はざれば忽ち斃死するので取扱ひ困難である。

野猪はマレー地方には 3 種あるが、何れも農作物を荒す害獸であり、其の體軀は大ならず又其の力も弱い、一層大型であるボルネオ、スマトラ及びリオーリング群島産のものと同様の農敵であり、又ゴム園に於ける脅威である。ランカウイ島には又 1 種の倭小なる野猪が生棲して居り、メルギ群島、テナスセリム地方の所産たる *Sus jubatululus* と近似のものが生棲して居る。

大野牛 (*Bos gaurus hubbacki*) Bison 又は Gaur 即ち *Seladang* は、インド産の典型的野牛とは細部に於て多少の差違はあるが、昔から半島一圓何れの地にも非常に多く生棲して居たもので、今でも普通どこにでも森林中に群棲して居るが、セランゴール州では殆ど絶滅的に減少したと聞いて居る。パハン州に最も多く、ネグリスマラン州、ペラ州、ヂョホール州にも相當の数が普通に生棲し、植民地には今はこれが横行を見ぬのである。主として黄色を帯びた褐色又は黒色で、草原又は竹林中などに好んで棲み、相當に兇暴なものである。第 2 種 *Bos sondaicus*, Canting, Tsain 即ち *Sapi* は半島北部クラ地峽シヤムの國境から北へかけて普通に生棲して居り、其の角の形狀に依り、前述の大野牛とは區別し得べく、又脊骨の隆起は前者ほど大ならず、更に四肢及び臀部の白斑等に依りても區別出来る種である。

眞の鹿即ちインド産の Sambur は濃褐色の毛を有し、又鬣を有する大鹿に近似して稍小な

る *Cervus unicolor equinus* はマレー人の所謂 *Rusa* で、今でも到る處に生棲し、シンガポールの島中にさへ居るが、ペナン島には居らぬ。

「吠鹿」 *Cervus muntjac* 即ち *Kijang* は数は多いが、生棲する地方が限局して居る。

俗に「鼠鹿」と稱する小型の鹿は、インド、アフリカ州にも産するが、實はマレー半島固有動物と云ふべきもので *Tragulidae* に屬する。これは鹿には違ひなきも、原始的のもので眞の鹿ではない。體軀甚だ小であつて、脊肉隆起し、細小なる四肢を具へ、その牡は上顎に1對の相當に長き牙を有して居る。この2種がマレー地方に普通に生棲して居る。第1の *Pelandok* (*Tragulus kanchil*) は體型最も小で、輝やける毛を有し美しく、他のもの *Tragulus napu* は粗毛で色彩も美ならず、體型稍大であり、現今稀で唯沼澤地方に生棲して居るが、アメリカ土人間に語り傳へてゐる神話の「兄弟兎」(Brer Rabbit, 米人 CAHODLER HARRIS: 1843-1908 の動物禽話集 "Uncle Remus" を見よ) と同一なる着想を以てマレー人間に傳説として知られて居る動物である。

マレー半島北部より中央部にかけて高山地帯は總て石灰岩の崖であるが、此邊一帶何れの地にも居る羚羊 *Kambin goa* 又は *Kambing gurum* (*Capricornis sumatrensis*) は、日本産の *Nemorhaedus* と近似して居る。これは相當多數に生棲しては居るが、其性質上捕獲せらるゝことが少く、峯の頂などに發見する動物である。又スマトラ島産のものと同種でなくとも非常に近似したものと知られる。

齧齒類は種類甚だ多く殊に半島では最も多い。ムササビ *Kubong* (*Petaurista nitda*) はマレー地方には珍らしからぬもので、その大なるは大凡家猫に比すべく、その毛色は赤褐色、森林中にありては高さ 30m の樹梢より斜に空中を滑翔して遠く 100m 以上も飛翔するのを見る。又小なるもの *Tupai* (*Petaurillus kinlochii*) は鼠より稍大なる程度の灰白色のものでは殊に多く生棲して居る。*Tupai* と云ふのは右のムササビ以外普通のリスのことをも總稱する。リスは非常に多く生棲して居り市内にすら多數見受け、公園の如きには幾百を以て算へることが出来るが、其毛色、習慣、大小等も亦種々あつて一様ではない。*Menetes*, *Lariscus*, *Rinosciurus* 等何れも主として地上に生棲するが、他にも色彩の更に美しき幾多の種がある。又樹上生棲の屬に於ても、たとへば暗色の毛を被る *Sciurus prevosti* とか *Sciurus tenuis* がある。後者は黒色、白色、銀白色、橙黄色等各種の美しき毛皮を被るもので愛玩用としても相當のものである。

鼠類は甚だ多數に生棲すること勿論で、他の多くの地方と同様大凡其地の人口と比すべき位の生棲數を有する筈なるのみならず、又野生のものが甚だ多い。シンガポール、ペナン兩港に於ては *Rattus decumanus* は船舶に依りて移住し來りしこと明確であり、*Gunomy* 即ち *Bandicoot rats* も亦同様である。歐洲の外、印度よりも右兩種の鼠族が船舶に依りてこの兩

地に渡來したことを察し得るが、半島本部にはこれ等の鼠は見當らず、又は甚だ少ない様である。半島全部を通じ、殊に鑛山所在地、大小の都市には近年非常に多數の *R. griseiventer* を見るに至つたが、これは實に最近10ヶ年間のことで、確かに支那人に依りて新たに移入せられたものだと考へて居る人が多い。勿論一番に多いのは *Rattus rattus* であつて、これは都市田園を問はず比すべきもの無き位に行き渡り又數も多いが、これも亦實は人爲的に當地方に移入したもので天然の所産でないことは確かである。其他、船舶に依り移入せられた *Musculus* も亦家屋の内外到る處に出沒して居て、毛皮銀白のものも亦稀でないが、多くは鼠色である。又鼠色のものと雖も腹面は淡白色を呈すること他地方のものと同様である。

ヤマアラシ Porcupines は歐亞産のものは *Hystrix* 米國産のは *Erethion* と稱するが、マレー半島には3種ほどが生棲して居て、體軀大にして短尾なる *Acanthion brachyurum*、長尾の *Atherurus macrourus* 及び俗に「毫猪鼠」と呼ぶ *Trichis lipura* が居る。その他近似種 *Rhizomys sunatrensis* 俗に「竹籤鼠」とても云ふべきものは、好んで竹籤に住み、體軀短小、野兎の小形のもの位で、銀白色の美しい毛皮を被り、頬は赤く、尾は無毛である、元來穴居性のもので、その齒は甚だ鋭く強力で、容易に鐵素製の罐を噛み破ると云はれて居る。

食蟲類に屬するものでマレー地方に生棲するものは多くない。その内 Tupaiidae (Tree shrew) に屬するものの2種が稍目立ちて見えるのみであるが、これと樹上生棲する半夜間動物で、一見してリスの如くであるが、又、更に稀なるもので *Ptilocercus lowi continentis* と稱し、其尾が一見して羽毛状で、横に帶環を周らしたるが如き横紋があり、尖端のみ有毛で、尾幹は兩側に羽毛状のものも無く全く赤裸であるが夜間動物である。

其他歐洲産のハリネズミに類する2種の動物も居る。其1つ *Tikoos bulan* 月鼠 *Gymnura gymnura* は惡臭ある奴で長き黒毛の尖端白色なるものを被り尾は裸で、他の1種 *Hylomys suillus* は柔毛を被りたる鼠位の大きさの動物で、その尾は裸であり體軀は短小である。

「麝香リス」とも稱すべき *Crocidura* に屬するものも數種生棲して居る。これは小型の鼠で尾は太く尖端が尖銳となり、毛は普通黒色乃至鐵色である。その1種で通例「麝香鼠」*Chenchurut* (*Crocidura eerulea*) は、恐らくはインドから移入せられたものと思はれるもので、人家に出入し、その活動は家鼠ほど活潑でなく、容易に追及し又捕獲し得る。名の如く甚だしき惡臭を發する動物で通例これを rat 又は mouse と呼ばず musk-shrew と呼んでゐるのである。

最も不可思議なる存在はネコザル Flying lemur (*Galeopterus peninsulae*) *Kubin* と稱する夜行動物である。之は猫位の大きさで柔らかき銀白乃至灰白色、稀には赤色の毛を被り、これに白色の斑點などあり、捕捉性の尾を有し其の周圍は飛翔に當つて擴張する肉膜を具へて居る。尙、この動物の前齒列は奇妙なる形狀の細小なる橢形となつてゐて、その用途は未だ確

實に知られて居らぬ。更に注意すべき點は其の毛皮の上に綠色の顯微鏡的微細なる1種の藻類を生育せしめて居ることで、これはアメリカ産のナマケモノにも亦見らるゝところであるが、容易に酒精を以て拂拭し去ることが出来る寄生物である。

翼手類はマレー地方には約60種ほどが生棲して居り、最も大なるものは所謂「大蝙蝠」(*Pteropus vampyrus mamaccensis*) Giant fruit bat 即ち *Keluang* と稱し、充分に發育せるものでは手翼の兩端間が1.5mにも及ぶので、「マングローヴ」の繁茂せる沼澤乃至海岸地帯に數千頭の群を成して生棲し、密雲の如くになりて飛翔し農園等を襲ふて専ら果實を荒す害獣である。其他稍小型の例へば石灰洞中に陰棲する Leaf-nosed bat とか、又特にシンガポールに於て常に見る Naked bat (*Cheiromeles torquatus*)と稱するもの、俗にトビネズミ *Tikustrobang* などとも稱して居る。何れも飛翔速力甚だ速かで、夜陰に乗じて市内外を飛び廻つて居るとは人の知る如くである。又海岸地方には黑色の髯を具へたる特種のカウモリも數多く生棲し、更に最も小型のもので *Emballonura peninsulæ* と稱する眞黑色のものが居る。

海牛類にはザンノイヲがある。琉球方面では俗に「ザン」と稱して居り、體長凡そ3m位、*Dugon* 或は *Duyong* (*Halicore duyong*) 俗に *Proempooan lant* 即ち海女と稱して居る。我邦の語り草の「人魚」はこれに基づくか、實際その哀調ある鳴聲は1種の悲痛なる人の叫び聲の如くでもあり、その半身を浪間に現はし高く頭部を擧げて訴ふる如くに吠える様子が如何にも薄倅なる婦人が海に身を投じて最後の怨みを述ぶるが如し、と幾多の著者も記述して居る。この動物はシンガポール近海ヂ、ホール州、ネグリスミラン州の海岸には比較的稀でない。又リオ群島(シンガポールの沖合、赤道直下の蘭領群島である)邊では、此動物の齒牙から喫煙パイプを製して用ひたり、更にマレー人に云はせると、此動物を生擒にしてその涙液を採取し(儒艮は陸に揚ぐれば啼泣して落涙するものであるが)これを以て貴重なる1種の「惚れ藥」を作ると云ふ話である。

鯨類としてはマレー近海には抹香鯨 Sperm whale (*Physeter macrocephalus*)が居る。其他には曾てシャム及びマラッカ海峡の海岸で小型のインド鯨 Indian fin whale を捕へた記録もあるが、まづ代表的のものは抹香鯨のみである。その他に南洋鯨 (*Neobalaena*) Pigmywhale, 小鯨 (*Balaena*) Grey whale も居ることは居る。

イルカは數種生棲し、就中全白の體軀に眞紅色の鰭を具へたる *Sotalia sinensis*, 其他鐵灰色の *Steno plumbeus* などは特記すべきものである。更に大型である Indian porpoise (*Orcella brevirostris*), Indian black fish (*Globicephalus indicus*) なども茲に附記して置く必要のある海獣であらう。スナメリ *Neomeris* も亦著名のものである。

食肉類には「鯨鯢」「峇山甲」 *Tenggiling* (*Manis javanica*) がある。歐洲人は俗にこれを Armadillo (スペイン語)と云ふ。稀なもので無く、タミール人は其鱗片から1種の珍貴な嗜

好的食料を製し、支那人はこれを薬用に供する。

## 2. 鳥 類 (a)

マレー地方に生棲する鳥類は其數 650 種に上り、面積の大なるマストラ、ジャヴァ、ボルネオ等の諸地方に比較するに種類の數も實數も遙かに多い。ボルネオなどとは違ひ、特別の地方種とか珍奇のものは居らず、先づ附近地方と大概同じ種類のものである。然し北方の大陸と直接の連絡があるから斯の如く鳥類が多いのかと思はれる。又マレーの山岳地帯には成るほど他の低地には發見せられぬ種類も生棲するが、之は特別に半島固有のものでもなく、附近の諸島にも山間には居る鳥である。又ネパール高原、印度支那、テナスセリム地方の山間に居る鳥と同系のものであるから。何もマレーに限り地理的に特に鳥の生棲分布が變つて居ると云ふのでもない。

Galliformes は約 16 種居るが、最も聞えて居るのは Jungle birds (*Gallus gallus*) *Ayam utang* (森雞) である。又ウヅラも普通 2 種ほど草原の間に見られる。

ノガン Bustard quail, *Puyoh* は愛飼鳥として籠中に養ふべきものである。東海岸に於ては孔雀が生棲し、主として大河の岸邊に散見し得るのである。普通のキジ *Kuang* は非常に多く生棲し、森林中何れの地にも居るが、シンガポール及びペナン島内のものは捕へ盡されたか今は影を見せぬ様である。

一般に Wood partridges と呼ぶのは Ptarmigan ライテウの 1 族で、マダラウミスズメ、アカモモ等も同種屬の鳥であるが、これは中々數多く生棲して居る。その中にも *Siul* (*Rollulus roulroul*) は小型で黒色及び緑青色羽毛を有し、眞紅の長毛の如き雞冠を立てたる美鳥は有名なもので、又「尾長躑鳩」とでも呼ぶべき *Selantin* (*Rhizothera longirostris*) は主として竹叢中に棲む夜間鳥で、英國其他各所に生棲するシャコと大差はないのである。

鳩鴿類に屬するもので此地方常棲のは 24 種類ほどあるが、其の中、8 種ほどはアラバト *Butreron*, *Osmotreron*, *Treron* に屬するものも共にして置くが、土語 *Punai* であつて南アジア洲一圓に生棲して居る鳥である。これは普通の狩獵には幾らでも撃てるので平凡な狩獵獲物と云ふべきものであらう。White breasted fruit dove (*Ptilinopus jambu*) *Punai gading* は、其腹面が眞白で、それに眞紅の斑紋があり、美しき雞冠を頂いてゐる美鳥である。

英人の所謂 Imperial pigeons と云ふのが 3 種ほど居る。Pergan 即ち *Carpophaga* 屬で、その中でも *Carpophaga oenea* と云ふもののみが普通に見られる。これは羽毛が銅赤色であるが、歐洲産のものよりも大型で飛翔力も強大、狩獵の獲物として美事である。この類の鳩は我國ではカラスバトの名を以て知られて居るが、その大きさを彷彿せしむるには兎に角、その美しさを表はすのに少々これでは物足らない。勿論此種は我國には居らぬから適當の名も

ないが、少くもマレーのカラスバトは非常に美しき大鳩である。

ニグツクバト Nutmeg pigeon (*Myristicivora bicolor*) Rawa は、大群を爲して飛翔する鳩で體毛はクリーム色乃至白色、翼及び尾は黒色であるが、沼澤地帯に好んで棲む。これも亦美しい鳩である。

更に、稀ではあるが Nicobar pigeon (*Caloenas nicobarica*) と云ふのが居るが、これはその羽毛が暗緑色金屬光で、丁度光輝ある「ブロンズ・エナメル」の如き色彩を放ち、長き狭細なる頸毛が頸部及び脊部に生じて居る。ニコバル島とは人の知る如くマラッカ海峡の西方、印度洋ベンゴール灣のアンダマン群島の南に伍する1群の島で、北緯8度、東經92度位の處であるが、種々珍奇なる動物、殊に魚介類、海藻、鳥類、昆蟲等の豊富な處で、近年眞珠を産することも知れて居る地方である。

家鳩、土鳩に至つては世界普通にありふれたものがマレーにも生棲するが、トバト (*Geopelia striata*) は誰知らぬ者も無いものである。ヤマバト又はヨサウジバトと稱する Turtle dove (*Streptopelia tigrina*) には、頸部に市松模様の如き斑紋があるのが多いが、これは主として米田、又は廣野に生棲して居る。

Ralliformes はこの地方には12種程生棲して居り、普通の「クヒナ」及び「コバン」、赤松雞 (アカライテウ)、又秋雞の1種で *Porphyrio* 屬の Purple gallinules と云ふ様な鳥も稀ではあるが発見されるし、更に普通なのは、胸毛の白いクヒナ (*Amaurornis phenicula*) Ayam-ayam である。これは灰色がかつた黒色の背で、胸面は白く、嘴は鼠色を帯びた緑色で、その基底部分は赤色であるが、水邊到る處これを見ざるは無しと云ふ程多く、時に家庭にも侵入し來る鳥である。その他に普通なるは矢張り Banded crakes (*Rallina* spp.) で、大群を爲して來る渡り鳥である。

Lariformes, Terns, 土語總稱 *Chamar* は、マレーには16種程が多くは北の方より渡り鳥として來るので、中には既に固有生棲鳥となつておるものもある。其1種、小型の鳥で *Sternula sinensis* と稱するのは東海岸遠く河上を溯りて砂丘に産卵し、又 Tioman 群島などの岩嶼に營巢するのもある。而して結局眞の「カモメ」は當地方には居らぬのである。

Charadriiformes は約50種ほどマレー地方に生棲して居るが、其中珍奇なものは1つもなく、總て歐洲其他に常棲して居るものと大同小異である。殊にマレー西海岸には氣候の都合か、これ等が多く居る様である。

「タイシャクシギ」、「チウシャクシギ」、「アカガネシギ」、「アヲアシシギ」(「イソシギ」)、「オジロシギ」(アヲアシチドリ)等の種屬諸鳥は普通に隨處に生棲して居り、又「ケウジョシギ」、「アヲチドリ」、「コジャクチドリ」及び(「オグロシギ」、「オホソリハシシギ」)その他「シロチドリ」、「ダイセン」、「ムナグロシギ」、「アイクロ」、「タケリ」等の千鳥族が、隨時隨

處に發見せられるし、更に長汀曲浦、砂白き海邊に至れば黄金色に輝やける美毛を被りたる「金色千鳥」とも呼ぶべき麗鳥を初め、諸種の千鳥の來往あり、その中當地方で産卵するものもあるのである。土着の千鳥としては、我國で「ヨジュン」と稱する種と近似の黒色の頸部を有する *Sarcogrammus atrinuctalis* (*Kasi sate sen*) 即ち「1錢オ吳レ」鳥と呼んでゐるが、成る程その鳴き聲は左様にも聞える。Painted snipes (*Rostratura capensis*) は我國で「オホシギ」、「コシギ」と稱する種類の鳥、これは實は眞の鴨ではないのだが、兎角左様の名で通つて居る3種ほどが見られるので、普通の Pin-tailed snipe と、歐洲至るところで食用に供する鴨、つまり普通焼麩麩の上に乗つて卓上を賑はすもので、殊にフランスではインド洋産の珍魚として知らるゝ Pégase の肉と其味似たりなど云ひて、好事者はこれを俗に Pégasine などと呼ぶが、これは辭書などに出て居らぬ1つの流行語で、兎に角珍味に算へて居ることであるが、此の種の鴨、又第3番目のものは體軀も稍長大で重量もある。「支那鴨」、支那人の「華鷓」*Gallinago mekala* は餘り多く居らぬ。「ホトシギ」Woodcock も獵獲せられた記録があるので、これも常に來往して居るのであらう。

ツル、カウノトリ、トキも亦時々眼に觸れるが、稍稀らしきものである。更に多少數多く居るのは沼澤地帯に棲む「印度鸛」(*Leptoptilus javanicus*) *Burong bati* (豚の鳥) のみである。これは飼養することも出来るが、性質が温順でなく動もすれば家雞を害したりする爲め愛育する人は少い様である。

鷺科に屬する諸鳥、「サンカノゴキ」、「ヨミゴキ」等の族は何れも相當多く棲んでゐて、7,8種を數へ得るが、面白いのは米田、水邊等に於ける水牛の群と殆ど共棲的に常に見出さるゝ1種で「白鷺」又は「コサギ」*Cattle egret* (*Bubulcus coromandus*) *Bangau* 又は *Opas kerbau* (水牛の守衛) は普通のもので、更に稀なるはフランスの *Aigrettes* と稱する白色の美羽を有する1種、これは今では保護の爲め獵獲を禁止されて居るものである。又鷺に至る處に多少居るが、シンガポール及びペナン島では見當らず、マラッカ島でも捕へたことを聞かぬ様である。

鴨類は不思議に當地方では稀で、7,8種生棲してゐる筈であるが、中、2種ばかりが兎も角折々目に觸れるものと云へる。「マガモ」(*Dendrocygna javanica*) *Tree duck*, *Belibis*, 「コガモ」(*Nettopus coromandelianus*) *Catton teal* がこれで、「マガモ」の方は褐色を主色とした明るい色の羽毛で、パハン州、ペラ州、乃至其れより北部には更に普通に獵獲されるが、「コガモ」は寧ろ「アヒル」に似て小型、背面は灰綠色の金屬光澤を有する羽毛、腹面は白色、特にその嘴がアヒルに似て居るので直ちに區別出来る。パハン州、ペラ州、バーナム河、(セランゴール州)、シンガポール等に生棲して居るのである。

全蹼類には「鷓」及びこれに似たる英語で所謂 Darters (*Plotus*) に屬する海鳥、其他、「軍艦鳥」、「オサドリ」、「ペリカン」等を算へ得るが、軍艦鳥は海洋遙かの沖合のみ生棲し、又オサドリ (*Sula sula*) は勿論マレー語から來た名である。土人俗に *Itek laut* 即ち「海のアヒル」と稱する。チョコレート褐色に或は白色を呈した普通の海鳥である。

鷲鷹類にはマレー半島に生棲して居るのは King vulture ハゲタカ (*Optogyps calous*) で、之は立派な鳥で黒色の羽毛に被はれ、頸部のみ白色、脚は無毛で白く、頭部は名の如く禿げて居り頸部に露出して居る皮膚と共に燃ゆるが如き眞紅である。其他2種あつて羽毛は褐色であるが、何れも現在は稀であり、ペナン島の南方に居る。然しシヤムに近き半島西海岸、又東海岸ではトレンガス州の南邊には相當に生棲して居る。「ハゲワシ」 *Cinereus vulture Aegyptus mona* も亦珍奇なる存在として當地方に折々報告せられて居る。

マレー半島で普通見らるゝ鷲鷹科はトビ *Brahminy kite*、ミサゴ及び大型の灰色乃至白色の食魚鷲、以上3種のみである。ミサゴ *Lang sipvt* (牡蠣ワシ) は英國近海でも稀に見らるゝ *Ospray* であるが、それは潮の干満に當り1種の奇聲を發して牡蠣其他の貝類に潮の満ち來ることを知らず役目を有する鳥であると思はれて居る。

其他の猛禽類で、多少とも目に觸れる小型の Sparrow hawk (*Accipiter gularis*) *Rajawali* は人家を侵しその家雞などを襲ふことが屢ある。尙、*Pandion haliaetus* 及び大型の蛇喰鷲 (*Spilornis*) がゐる。主として澤蟹、蜥蜴、小魚、鼠等を常食とする灰褐色の美事なる羽毛と、白色及び黒色の立派な雞冠を頂いて居る鳥である。

肉食鳥で最も小型のものは白色及び黒色のモズの種類で Grasspopper hawk *Lang bilalang* は、體軀は「ツグミ」よりも小であるが、自分より2倍以上の大なる鳥をも忽ち殺して喰ふ位勇猛である。

クロトビ Honey buzzards (*Pernis* spp.) も居る。この鳥の中2種ほど歐洲に於けるものと殆ど同一の外見を有するものがあるが、更に、冬期中はワタリモズとも稱すべき1種の鷓の飛來を見ることあり、又2,3の地方に Bat hawk (*Machaeramphus alcinus*) がゐる。夜間鳥で主として晝間は石灰洞中に陰棲する。この鳥は拂曉、黄昏の時に於て最も活潑であり、蝙蝠などを多く捕食するので此の名がある。

夜禽類は當地方には約20種ほどが生棲して居り、何れも數は多くない。

ミミツク Eagle owl (*Huhua orientalis*) は主として叢林中に棲むが、縞目を有する1種で主として小魚などを食とする *Ketupa ketupa* は海岸に遠き邊では蛙、鼠、蟹、其他水田中に居る雜魚を餌として生きて居る。更に好んで月夜などに飛翔して來る小型の *Pisorhina lempiji* Hawk owl (*Nimon*) の1族。最後に冬期にのみ飛來する *Burong punggok* はマレーのお伽話に出て來る永久の戀を守る鳥になつてゐる。其他に附言すべきものは *Malayan pigeon falcon*

(*Microhierax tringillarius*) で日本ではこれをスマメハヤブサと稱し、全長 15cm, 翼長 10cm 以内の小鳥で隼亞科中の最小のものである。

アウムの種類は割合に少く、其中尾の長さ *Bayan* (*Palaeornis*) の 2 種は南方に多く棲息し、又小鸚鵡も 2 種ほど普通に見られ、小型の緑色藍色、紅色の *Serindit* (*Loriculus* spp.) は愛飼する籠鳥であるが容易に手に入るものである。

黄冠鸚鵡 (キバタン) Cockatoos はマレー半島には棲息して居らず、世に誤傳せられて當地方に問ひ合はす人あれど間違ひである。

ヨタカ (*Podargidae*) Frogmouth は勿論夜鳥で、當地方には其 3 種ほどが居るが、その柔軟なる苔の如き肌ざはりの羽毛など、梟鴞などに甚だよく似て居る。この鳥は濠洲及びタスマニア地方に棲息するアヲバツクに近似し、Morepork 又は Mopoke と大凡同一のものであるが、その巢が一種不思議なもので、直徑僅かに 1 寸 5 分か 2 寸位の纖維を結び合はせた圓板で、その 1 端に倚ることすら危ふげであるが、その上に上手に産卵するのであるから驚く外無いのである。

佛法僧科に屬する鳥でマレー地方に棲息するのは僅かに *Tiomg batu* (*Euristomus orientalis*) のみであるが、ツグミより稍大型で、藍青色、暗褐色、暗綠色等の美しき羽毛と眞紅の嘴を有し、蠻林には普通に棲息し多くは朽木の洞に居る。

カハセミの族はマレー地方には計 16 種を算へ、或るものは海岸即ち鹹水に臨みてのみ棲息するが、他の數種は水田、蠻林中の水流等に寄食して小魚類を食餌とし、更に數種は全く水を離れたる密林中等に生棲して魚類を食とせず、他の小動物を捕食するものもある。其中最も普通なるは小型の *Alcedo bengalensis* で、これは歐州に常棲する King fisher で、又大型の *Halcyon smyrnensis* は美しき珊瑚紅色の嘴を有し、背面の羽毛は藍青色、腹面はチョコレート及び白色である。其他、海岸地方に普通に生棲する「蝦の玉様」(*Halcyon chloris humii*) *Raja udang* は多くは背面は青色、腹面白色の鳥であるが、其常食は小魚と云ふよりは寧ろエビの類である。

大角鳥科 (*Bucerotidae*) の族は恐らくマレー半島に於ける最も主要なる郷土的産物であるが、俗に「犀鳥」などと呼ばれる如く、其見事なる犀角様の大なる嘴と硬き雞冠は往々全體長の半分にも及ぶほど立派なもので、これは一見して忘れ難き奇鳥であるが、高山の頂上より低地と沼澤地帯に至るまで廣く棲息して居るものである。其最も大なるものはオホツノドリ (*Rhinoplax vigil*) *Tembang mentua* で重き大なる嘴を具へ、その尖端は骨化して硬きこと石の如くである。又、狭義の「犀鳥」(*Rhinoceros hornbill*) は恰も 2 本の嘴を有するが如き外觀を呈し、1 本の嘴は他の嘴の上に重なり居る様に見ゆるので、その上のものは勿論、雞冠であるが中央より矢狀に左右に分れ、頗る見事なものである。角鳥の族は一般に飛翔力強く、非常

なる大距離に迄強行するに耐えるが、其飛翔中は羽音よりも寧ろ巨大なる嘴で風を切る音が  
大であつて、随分遠方まで響き渡る様な奇聲を放つて大空を翔るさまは誠に盛觀である。

啄木鳥類中の蜂喰鳥科 Bee eaters *Berek-berek* は半島各地に廣く棲息し殊に平原地方に多  
いが、栗色、褐色の羽毛を被り長き尾を曳くものと更に稍大型なる綠色の背部、眞紅の腹部  
を有する同じく長き尾を有するものが居て、後者は森林中にも居るのであるが多くの矢張り  
廣野を飛ぶ鳥である。

ヨタカの族はマレー半島では稀有の鳥であつて4種ほどが棲息して居るが、その中の1種  
はよく黄昏時分に街路の上などから不意に足元より飛び立つて人を驚ろかすことなどある例  
の饒舌なる小鳥で、その呼び聲からマレー人は *Tunktunk* と呼ぶ。月夜などには甚だ煩はし  
き聲を立てつゞけて人をなやませるものである。これの一層大型のもの *Tiptiban* (*Cyncornis*  
*temmimck*) は主として蠻林に居るが、その聲は前者よりも多少音樂的である。

アマツバメ科に屬するものは約15種ほど此地方に棲息するが、その大るものは黒褐色の  
燕 *Caetura* で燕尾が鋭く細小に突出して針の如く、その飛翔は他の如何なる鳥よりも速かで  
多くは大雨の後に現はれ、山間では普通に何時でも飛んでゐる。

普通の家燕で、人家の軒の下に營巢する *Apus* spp. も勿論棲息して居るし、更に小型の  
*Collocalia* spp. は多くは石灰洞中又は岩壁、斷崖などに營巢するもので、「岩ツバメ」と俗に  
これと呼稱し、支那人の最美の御馳走として知らるゝ「燕巢」はその巢を肉汁と共に糞と爲し  
たものであるが、實質は燕の唾液を主成分とした「ゲラチン」質のものである。

啄木鳥類 *Burong kesumba* は一般には Trogons として知られて居る。マレーに居るのは6  
種類ほどである。何れも鳩と「ツグミ」との中間位の大きさで柔順な鳥であるが、羽毛は厚く柔  
かで、背面は眞紅、腹面は黄色又は橙黄色、或は背面が黒色乃至褐色、腹面が眞紅又は橙黄  
色のものが居る。その雌は色彩が雄ほど美しくない。

郭公と總稱すべきもの約30種が當地方に生棲して居つて、その半數位は渡り鳥として冬季  
間のみ渡來するものであるが、他のものは常棲鳥である。其の中 Hawk cuckoo (*Hierococcyz*  
*spp.*), True cuckoo (*Cuculus* spp.) には歐洲産のものと同一のも居る。尙その他、Indian koel  
(*Eulynamis honoratus*) 即ち「ホトトギス」であるが、之は海岸には非常に多く棲息して居る  
ものである。又、その非常に五月蠅き鳴聲から人をして神經衰弱に陥らしめ腦病に罹らしめ  
ると迄言はれる鳥で Brain-fever birds (*Cacomantis merulinis*) がある。常棲性のもはアメ  
リカ産の同族鳥と異りてその鼻孔が圓形である。アメリカ産のものは鼻孔は橢圓形で *Coc-*  
*cyzus* と云ふ屬に入れてある。

當地常棲鳥中で最もよく知られてゐる Crow-pheasant (*Cantropus* spp.) *Bubut* の諸鳥、こ  
れは美しくない鳥で、羽毛は醜き黒褐色で、草原や鐵道線路などでよく見かけるもの、其他

Bronze cuckoo は燕よりも稍大で背面は金属光を帯びた緑玉色乃至紫緑色である。

啄木鳥と Toucan との中間に位する鳥で Capitonidae に属する諸鳥 (Barbets) はアフリカ洲, 南アメリカ洲にも居るが, まだ東洋諸地方の郷土鳥と云ふべきものの1つである。マレー地方には5, 6種が棲息し, 其最も著明なるは緑色又は褐色のもので *Calorhamphus* 属に入れる。多くは森林鳥であつて, その中2種が田園鳥であるが, 1つ「鍛冶屋鳥」(*Zantholaema hoematocephala*) *Tukang besi* は其鳴聲が金属相打つが如き騒音で, 或は鐘を亂打し或は鐵鉢を叩くが如くに聞ゆるから此名があるが, ペタ州タイピン町の南方以外には棲息して居らぬ。

キツツキ (Picidae) *Belatok* は種類も多く, 實際棲息数も多いもので, マレー半島を通じ約30種ほどが居る。その最大なるは「シロハシガラス」, 「ミヤマガラス」程度の灰白色のものから, 最小なるは緑色の羽毛を有する「コマドリ」大のもの迄居る。又其の生棲区域も山澤の頂上から, 沼澤地帯の低地迄廣いものである。前者は *Alophonerpes pulverulentus* 後者は *Sasia everetti* である。

Pipridae 科 *Eurylaemisorpes* の諸鳥, 即ち幅の廣き大なる嘴を有する1族も東洋固有の鳥であるが, マレーの森林中には7種ほど居る。小なるは青緑色又は黒色の *Calyptomena viridis* から, 稍大なるは體毛黒色又は朱色で, 嘴は黄色又は青色の *Cymborhynchus malaccensis* が主なるものである。その巢は泥土及び朽葉を以て固め, 植物の氣根などに垂下して水面上に吊り下げてあるのが特異である。